

# 第4章

世界遺産の島

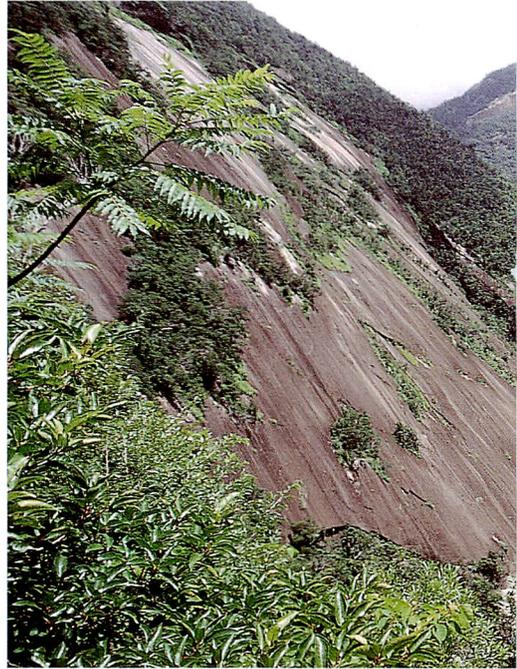
# 屋久島

田島康弘  
(鹿児島大学教育学部)

屋久島の世界との結びつきを見ると、日本が鎖国政策をとっていた1708年、ローマ法王庁の宣教師ジョアン・バディスタ・シドッチがキリスト教の布教のために屋久島南部に上陸している。彼はまげを結び武士に変装したが、捕らえられて江戸に送られた。シドッチを取り調べた新井白石はシドッチの知識や見聞の広さに感服し、その内容を『西洋紀聞』等にまとめている。

また、1914年、アメリカの植物学者アーネスト・ヘンリー・ウイルソンが来島し、植物の種類が多いこと、生態が特殊で貴重なことなどを学会で報告し、屋久島をはじめて世界に紹介している。彼によって紹介されたヤクスギの切り株のうち最大のものがウイルソン株と呼ばれている。

しかし、なんと言っても屋久島を世界的に有名にしたのは、世界遺産への登録であろう。屋久島は1993年12月、ユネスコの世界遺産条約に基づく自然遺産として、日本ではじめて登録され、世界に知られることになった。屋久島のすぐれた自然が普遍的な価値を持つものとして世界的に評価されたわけである。屋久島の自然の特殊性やその貴重さは世界遺産への



登録理由に要約されているので、それを引用しておこう。

「屋久島は中心部に九州の最高峰宮之浦岳(1,935m)をはじめとする高峰が聳える山岳島であり、かつ年間4,000～10,000mmもの多雨に恵まれていること等から、樹齢数千年のヤクスギをはじめとして極めて特殊な森林植生を有している。



洋上アルプスと言われる屋久島の森林景観  
©田島康弘

海岸付近のガジュマル、アコウ等の亜熱帯植物から、タブ、シイ、カシ等の暖帯、モミ、ヤマグルマ等の温帯、更にヤクザサ、シャクナゲ等の亜高山帯に及ぶ植生の垂直分布が顕著にみられ、また多くの固有植物、北限・南限植物が自生していること等特異な生態系を構成している。

特に本地域の傑出した自然の特徴として樹齢数千年に及ぶとさ

れる直径3～5mにも達するヤクスギがあげられ、老齢の巨樹林は生態的にも、かつ形態的にも世界的に貴重な天然林と考えられる。

さらに、当地域には、アカヒゲ、アカコッコ(危急種)等絶滅の恐れのある動植物が生息し、自生している。」

島民は、自分たちが生活する舞台である島の自然が、国際的にすぐれて普遍的な価値を持つものとして高く評価されたことを喜び、これを自分たちが持つ資産であると捉え、この資産の価値を高めながら、これをうまく利用し、生活水準を引き上げてゆくことを望んでいる。また、有史以来島民は、この自然の中で自然を利用し、自然と調和して暮らしてきたのであり、島民の生活はこの自然と切り離すことのできない一体化されたものである。そこで次に、この自然の中で営まれてきた屋久島島民の生活や暮らしについて捉えてみよう。

---

## くらしの変遷

---

屋久島は洋上アルプスとも言われるように、海の中に聳えたつ山岳の島で、平地は少ない。1640年以降、それまで神木として伐採されてこなかった屋久杉の利用が始まると、この屋久杉から作られる平木が島の主要生産物となり、貢納物(税)もこの平木で行われるようになった。江戸時代の記録である『三国名勝図絵』によれば「屋久島は全島が山であるから田畑が少ない。人々は山で杉の木を伐り、海で魚を採るので生活は豊かである。人々の心は純朴で、夜は戸を閉めることもなく、道に落ちている他人の物を拾い取るものもない」と伝えており、山と海の幸に依存した平穏な生活であった。

しかし、1875年開始された「地租改正」により、集落とその周辺の田畑を除く屋久島の土地のほとんどが官有地にされ、盗伐も禁止されて島民は山から締め出されてしまった。それでもカツオ漁が盛んな頃はなんとか生活ができたが、1900年頃からはカツオ漁が内地発動機漁船のために不漁となり、

島民は食の確保のために開田開畑を始め、サトウキビの導入など農業にも力を入れることになったのである。

1920年代後半のころからは一部入山が可となった山での木炭の生産と海でのトビウオ漁、それに畑でのサトウキビとカライモが生活を支えた。この頃の屋久島の生活は海に10日、里に10日、山に10日と言われ、1960年代までは、こうした生活が続いた。

しかしながら1970年代に入り、トビウオ漁が不漁となり、また、価格の低さから大型製糖工場やでん粉工場が閉鎖されて産業基盤の大きな転換期を迎えた。農業はエンドウ、バレイショなどの商品作物やボンカン、タンカン、ビワなどの果物が中心になってきた。また、観光客の増加による宿泊施設や屋久杉土埋木加工業の振興など、観光サービス業が新たな産業として注目されてくる。1964年には、国立公園の指定を受け、1971年にはヤクスギランドもオープンし、さらに小型飛行機(YS11型機)による空路の開設や高速船ジェットfoil「トッピー」の就航も行われて、交通の便も改善されてきた。世界遺産への登録は観光地としての

魅力をさらに高めたものと言えよう。

しかし、この転換期を契機にして、農家の離農転出が顕著になり、それ以前の1960年代から始まっていた若年層の人口流出とあわせて、屋久島の人口は1960年の約24,000人をピークに減少の一途をたどり、島民の高齢化も進

んできていることが島の抱える大きな問題である。こうした状況の中で行政は観光と第1次産業の振興を町政の基本方針とし、観光地の整備や交通の整備を行い、また農業では果樹の他、ガジュツ、お茶などの商品作物に力を入れてきている。



資料：各年国勢調査より筆者作成

## 今日の 第1次産業の姿

ポンカンつづらばる かねなりは1924年、当時の村会議員であった黒葛原兼成が台湾から原木をもってきたことに始まる。はじめは評判が良くなかったが、次第に栽培農家が増えて、今

では「屋久島ポンカン」として有名になった。1970年頃から、販売時期のずれるタンカンも導入され、今日ではポンカンと肩を並べる程にまで生産を伸ばしてきている。

しかし、近年ヤクザルによる被害が次第にひどくなってきており、農家は樹園地のまわりを網や電気柵で囲ったりしてはいるが、側溝から侵入したりして、十分な対策に

はなっていない。

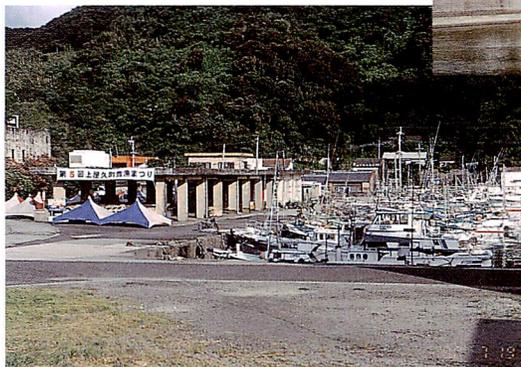
また、胃腸薬の原料である「ガジュツ」の栽培も屋久島各地で見られ、島内の製薬工場で薬に製造されて全国に出荷されている。

かつて盛んであった水産業は、近年は漁獲量も年々減少し、漁業に従事する人も少なくなってきたが、エビの内水面養殖の他、年間を通じてのサバ漁や5～6月に集中するトビウオ漁などが行われているに過ぎない。

こうした中で、一湊<sup>いっそう</sup>のサバ節工場などは原料のサバが不足し、枕崎あたりからサバを購入している

状況である。

この他、島内には屋久杉加工業者が約20社程存在し、工芸品の製作に従事している。原料の屋久杉は現在伐採を禁止されているので、「土埋木」を原料として使用している。「土埋木」というのはかつて伐採した屋久杉の切り株のことで、1000年以上の屋久杉の年輪は緻密で、樹脂分を多く含むため、腐らずに残っている。こうした特徴を生かして美しい木目のつぼや家具類などの工芸品が作られている。



漁港風景 ©田島康弘



サバ節工場 ©田島康弘

## 観光・サービス 産業の 新たな動き

屋久島への観光目的の入込客は、1975年の54,590人から1999年の153,503人へと約3倍に増えており、とくに、高速船ジェットフォイルの就航した1989年度から急激に増加してきている。この内訳は船による客が主で、航空機による客は船客の3分の1程度であったが、ジェットフォイル「トッピー」の就航以降はさらに船による客の増加が著しい。

季節的には、7・8月次いで5月に多く、12～2月の冬期の各月はピーク月の8月の半分以下になる。男女の比率に大きな差はないが、年齢的には20代、次いで10代の若者が多い。宿泊日数は2泊が最も多く、次いで1泊、3泊と続いている。屋久島観光のハイライトとも言える縄文杉登山者は年間1万人以上と推定されているが、これはほぼ一日がかりの登山コースであり、一般観光客は登山の代替として、バスでも行けるヤクスギラ

ンドや白谷雲水峡を訪れる者が多い。

宿泊施設の総収容能力は、2,124人(平成9年11月現在)であり、種類別では民宿が最も多く43軒、旅館が9軒、ホテル6軒などが主なものである。この他、公営施設(国民宿舎)1、民間ユースホテル1、ペンション4、ビジネスホテル2などがある。

とくに1990年代に民宿の増加が目立っており、地域経済における観光・サービス業の比重の高まりを示す1指標と言えよう。

この他、観光に関連した産業に前述の屋久杉加工業やみやげもの店などがあり、また、最高峰宮之浦岳や縄文杉登山を案内する案内業者(ガイド)も数十名にのぼると言われ無視することができなくなっている。また、屋久島のすぐれた自然を生かし、この自然の中でとけあって暮らしを営んできた人々の知恵を学ぶ新しい観光の姿であるエコツーリズムの方向が模索されるようになってきた。

---

## 行政による とりくみ

---

屋久島の世界遺産への登録の動きのなかで、行政機関である地元の上屋久町と屋久町の両町、鹿児島県、国は積極的に動いた。とくに鹿児島県は屋久島環境文化村構想をかかげ、積極的に取り組んだ。

この構想は、優れた自然を引き継ぎながら、地域の人々の生活を支え、豊かにしていくことが求められている屋久島で、従来型の発想である開発か保護かではなく、人と自然との新たな関係すなわち共生の在り方を模索しようとするものであり、言い換えると、屋久島環境文化村の基本理念は「共生と循環」という思想のもとに新たな地域づくりをめざすというものである。

こうした構想の下に、鹿児島県はその拠点として上屋久町に「屋久島環境文化村センター」、屋久町に「屋久島環境文化研修センター」を建設し、この構想の推進に当たっている。前者は屋久島の優れた自然とそこに住む人々の生活の全体を紹介する博物館的なも

のであり、また、後者は環境学習を学び、また体験もできる宿泊が可能な施設となっている。

この他、国は屋久町に「屋久島世界遺産センター」を建設し、また、屋久町も屋久杉の歴史を中心とした展示施設である「屋久町立屋久杉自然館」を建設している。

次に、地元両町による近年の循環型社会をめざした新たな動きをみよう。

世界自然遺産に登録された屋久島は「人と自然との共生」を掲げ「ゼロエミッション（廃棄物ゼロ）」に取り組んでいる。この具体化として、上屋久・屋久両町は1999年3月、資源循環型社会をめざす「エコタウンプラン」をまとめた。その目標は1998年度には15.3%にすぎなかったゴミの資源化率を2003年度までに99.2%に引き上げることである。

これを受けて屋久町で取り組んでいることの一つは廃食油を回収し、車の燃料として再利用する取組みであり、町は食用油をディーゼルエンジン燃料に再生する装置を導入した。もう一つの取組みは、発泡スチロールのリサイクルである。発泡スチロールを分別収集し、薬品に溶かした後、鹿児島

市の民間業者に送っている。

上屋久町では1998年から生ゴミの堆肥化に取り組んでいる。それまでは可燃ゴミとして焼却していたが、焼却炉の温度が下がり、ダイオキシンの発生の可能性が高まるため、生ゴミを分別し、堆肥化を始めたのである。できた堆肥は15kg200円で販売されている。この他、上屋久町では二酸化炭素を出すガソリンに代る電気自動車の使用を奨励し、町内には3か所の充電サービスステーションが設置されている。

「屋久島は地図上では点にすぎ

## 出郷者の帰郷(Uターン) と 島外者の来住(Iターン)

世界遺産に登録された今日の屋久島を語る際に、一度島を出て都会で生活し、やがて帰郷した人々が果たした役割を無視することはできない。

日本経済の高度成長期と言われる1960年代頃から多くの若者



屋久島環境文化村センター ©田島康弘

ない小さな島であるが、持続可能な循環型社会を世界に発信する気概をもって取り組みたい」と役場環境政策課のT氏は語っている。

が島を出て行ったが、ちょうどその頃は、島の遺産の中でも最も貴重な遺産である樹齢1000年を超える屋久杉が、次々と伐採されていった時期でもあった。ヤクスギの伐採は多くの島民の生活を一時的に支えはしたが、いずれヤクスギが伐り尽くされることは目に見えており、また、それは他に類をみない貴重な資源の消滅を意味した。

こうした島内の状況を見るに見かねて、一度出郷した出身者が帰郷するようになったのは1970年頃からである。帰郷した彼らは「屋



屋久島に来住した人々 ©田島康弘

久島を守る会」を結成し、屋久杉の伐採に反対する運動を起こした。この運動は屋久杉の伐採で生活している多くの島民と対立するものであったため、困難をきわめた。運動も思うようには進まなかった。しかし、結果としてはこの運動により西部林道地区をはじめとした自然林を残す一部の地域が、伐採から守られることになったのである。また、屋久杉の伐採も禁止されることになった。

帰郷者を中心とした島民自身によるこの屋久島の自然を守る運動は、今日の世界遺産への登録の動きの先がけとなったと行うことができよう。

外からの影響としてあげられるもう一つは、近年とくに1990年以降顕著となった、島外からの来住居住者の増大である。これまでずっと転出超過であった屋久島で1990年代には転入の方が多くなる年も見られるようになり、従って総人口も、特に屋久町では増加の傾向すら見られるようになってきている。

屋久町に入った来住者の特徴としては、それまで都会で生活していた定年前後の年齢層の者が、屋久島の自然の中での生活に惹かれて土地を購入し、夫婦で住み着き生活を始めるというタイプが多い。中にはホテルの従業員としての仕

屋久町への来住の理由

理 由	世帯数
旅行で来て気に入った	5
海、山、水、釣りの魅力	4
南の暖かい所に住みたかった	4
自給自足の田舎暮らしを求めて	2
世界遺産で有名だったので	1
旅行に来て分譲地を買ってしまったので	1
親戚がいたので	2
定年後の第2の仕事を求めて	1
土地の人の対応が良かったので	1
計	21

資料:筆者のアンケート調査による(200年7月実施)

事や民宿の経営を始める者もいるが、一般に定職をもつ者は少なく、仕事をするとしても、ポンカンやタンカンの収穫作業で働く程度である。それまでの地域社会の伝統やしきたり等の面で、来住者が集落民と摩擦を起こすケースも見られるが、

## 島の将来に つながる教育

世界的に価値あるものとして認められた優れた自然環境を資産として活用し、また、こうした環境を守るためにもゴミを出さない循環型社会をめざす屋久島にとって、未来を担う子供達に対する環境教育は、こうした地域づくりの一環として組み入れられるべきものであり、また、エコツーリズムによる新たな観光を創造していく上でも見のがすことのできないものである。

屋久島のただ一つの高等学校である屋久島高校には、国内でも珍しい環境科が新設され、将来環境問題の諸分野で働く有用な人材の育成に着手している。

また、鹿児島県が屋久町に設置

他方では来住者が中心となって、集落のホームページを作成し、農産物の通信販売や嫁不足問題への取組みなど諸問題の解決に取り組むような積極的な面も見られ、従来の集落に新たな刺激を与えている。

した「屋久島環境文化研修センター」では、県下の小中学生を対象として、屋久島の環境を活用した宿泊を伴う環境体験学習が計画的に実施されており、県の環境教育の一大拠点となっている。とくに島内の小中学生にとっては、日常的な催し物やイベントなど、身近に存在し利用しうる環境教育施設として貴重なものである。

屋久島が進もうとしている方向は、行政が示しているように貴重な自然を資源として守り、活用して、こうした自然と調和した第1次産業を発展させることであり、他方では、優れた自然だけでなく、こうした島民の生活をも資源とする新しい観光産業としてのエコツーリズムの創造であろう。こうした方向が今、屋久島で模索され、追究されており、その動向が注目されるところである。